

研究テーマ：1 年生らしい生き生きとした活発な授業を目指して

所属 須崎市立上分中学校

氏名 弘 瀬 佐 和

RG JH3

1 研究の背景

本校は美しい自然環境に恵まれた全校生徒 30 人の小規模校である。

1 年生は 12 人（男子 5 人、女子 7 人）1 学級で、まじめに丁寧に学習できる生徒が多い。しかし当初より静かに聞いているだけで、元気にしっかりと声で授業に参加できる生徒が少ないと感じていた。ALT が来校した日でも、あまり態度に変化は見られず、（もちろん楽しんだ生徒もいるが）何とか声を出させようと音読に力を入れて取り組むことにした。しかし、いつまでたっても声は小さく、非常に反応のよい生徒もそうでない方に引っ張られ、いくら話をしても評価をさせてもその時の理解だけで、あまり効果はなかった。集団としての特性も考慮しながら、教師側の授業への改善や工夫。努力するべきところも多々あり、1 年生らしい生き生きと活発に声が出せる、間違ってもどんどん挑戦することを嫌がらない姿勢を育てられる授業を目指し、アクションリサーチで授業の改善を行った。

2 リサーチクエスト

上記の観察の結果を踏まえて、次のように設定した。

「クラスの全員がコミュニケーションを積極的に取れるようになるため、音読を通して英語力をつけながら、人前で発表したり、英語を話したりすることを嫌がらない姿勢を育てる。」

3 予備調査

（１） 授業観察の結果

1 時間目に授業が多いこともあり、いつも導入の挨拶では「I'm tired.」と答える生徒たちが多く空気が重く、雰囲気作りが大切だと思った。音読の発表も、皆が聞く中で行うことに負担を感じている生徒がおり、ALT なしでも、もっと英語を話す喜びや楽しさを感じさせる授業作りが必要だと感じた。

（２） 音読アンケート

5 月に行ったアンケートから「音読が好き」と答えた生徒が 70% 弱いた。「しっかりと大きな声で読んでいるか」についても 70% 弱の生徒が「はい」と答え、指導者側の感じ方との隔たりを感じさせた。

4 仮説の設定

仮説 1 音読の方法をさらに楽しいものにするために、適切且つ計画的に音読練習を取り入れた指導を行えば、自信がついて人前でも声を出すのを嫌がらなくなるし、元気な声で音読ができるようになるだろう。

仮説 2 五感を使ってリスニング力・スピーキング力を強化するための学習を行えば、スキルアップにつながり、また視聴覚機器を活用することによってお互いの様子に刺激を受け、向上心も促されるだろう。

仮説 3 声を出す場面をどんどん設定し、発表することや話すことの楽しさ、失敗したときの後悔や悔しさ等を身をもって体験すると英語は生きたコミュニケーションの道具なんだと感じ、もっと力を入れて読もうとするだろう。

仮説 4 指導者側も話すことは楽しいという姿勢をもっと見せ、ALT との授業を工夫し、暗誦大会などを有効活用すれば、さらに読む練習にも意欲や活気が出て、しっかりと声で読めたり言えたりするようになるだろう。

仮説 5 音読練習で発音・アクセント・リズム感が訓練され、読む・聞く・話す英語力が高まり、話す経験を増やせば音読や話すことにも自信が付き、発声器官も英語用に鍛えられて声に出すことにためらいが少なくなり、学習により意欲的になるだろう。そうすると積極的にコミュニケーションが取れるようになってくるだろう。

5 計画の実践

仮説 1 に関しては、コーラスリーディングやソロ・バズリーディングの他にペア練習やロールプレイ・シャドーイング・英訳（翻訳）読み・パートナーチェンジ読み等を実施し、最後には必ず発表させた。発表後の評価としてのシールも意欲付けにつながった。



仮説 2 に関しては、運動会・文化祭等で指導者側に余裕がなく、うまく実施できなかった。

仮説 3、4 に関しては、予定していたインタビューテストは実施できなかったが、導入時の簡単な表現やローゲーム等は喜んで取り組んだ。また学年団の協力の下、校内英語暗誦大会に向けて学級内英語暗誦大会を実施した。校内の大会での上位 2

組が須崎市英語暗誦大会に出場できることもあり、生徒も大いに盛り上がった。

仮説 5 に関しては、音読練習で常時発音や声の大きさ、リズム、音の高低・強弱などに気を付けて練習し、ほとんどの生徒がうまく発表できるようになった。



6 実践の結果

12 月に行った「Look, one of my days!」の発表では、「家で 25 回ほど練習してきた。いっしょうけんめい練習してきていちばんいい物になった。前で言うのは楽しかった。もっと練習してきたら良かった。暗記してきたら良かった。」等の感想も見られ、保護者やクラスの前で、堂々と大きな声でカタカナも全く使用せず、スラスラときれいな発音で発表する姿は頼もしかった。

7 結果の検証

生き生きと活発に発表しあえる授業を目指して取り組んできた 2 学期。結果として声は出るようになった。12 月に行ったアンケートでも 83% の生徒が「1 学期より声が出るようになった」と答えている。理由としては「自信がついてきた。暗誦大会で鍛えられた。中学校になれてきた。英語の発表になれた。」等が挙げられた。1 学期の後半から徐々に声が出るようになってきたが、やはり体育祭終了後からの変化は大きい。学級担任や国語・音楽科等の表現への取り組みや班長会等の学校としての取り組み、さらに行事で 2, 3 年生と共にリーダーの仕事を経験した生徒の心身の成長は授業の雰囲気を変えてくれた。ALT にも積極的に話しかけ、元気な声で発表できるようになってきた。そういった成長が、学習に意欲的に取り組み、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢を育ててくれた。

8 成果と今後の課題

声は出るようになり、意欲的に学習できるようになってきたが、5 月と 12 月のアンケートの結果から「音読が好き」が 70% 弱から 50% に減ったことが分かった。いくら声が出るようになって、これでは意欲や興味も半減してくる。今後はもっと生徒の興味関心を育て、やる気や意欲が出る授業作りが必要だと思う。何事にもまじめに取り組み、英語がうまくなりたいと望む彼らに、恵まれた環境を活かしてよりコミュニケーションで、少しでも楽しくて学ぶ意欲の湧く

授業を作っていく必要がある。それがコミュニケーションの道具として使える英語になるこれからの課題である。